

東京学芸大学紀要 第三部門 社会科学 第三十九集 昭和六十二年十一月

中国近代史における西郷隆盛像

大石慶二 様

恵存

二〇〇三年一月十八日

中

村

義



中国近代史における西郷隆盛像

中村義
(歴史学教室)

はじめに

明治以来、最近まで刊行された人物伝（雑誌掲載を除く）で、一番多く対象にされたのは西郷隆盛のようである。⁽¹⁾庶民的人気の秘密は上野公園の銅像にみられる風貌、スタイルと「西郷星」にまで昇した彼の悲劇的な最後にあると思われる。

いっぽう周知のように、明治・大正・昭和を通して、大西郷、南州翁と呼称され、福沢諭吉、中江兆民、内村鑑三、頭山満、内田良平等、政治上、思想上、異なる立場から、「敬天愛民」の偉大な人物として讃美と尊敬をうけていた。したがつて西郷の歴史的評価は日本近現代史を如何にとらえるかに深くか、わってくる。⁽²⁾

ところで、西郷のもつ魅力はたんに日本人をとらえただけでなく、中国人の心をもひきつけていたのである。古くは左宗棠が言及したと聞くが、残念ながらこの原文は定かでない。⁽³⁾時代が下つて、一九三六年一二月一二日の西安事件の立役者楊虎城は、事件直後に、西南戦争が明治政府に反省を求める兵諫であったように、我々のこの事件は蔣介石に対する兵諫であると説明したと伝えられる。⁽⁴⁾

また魯迅が晩年、西郷に強い関心を抱いていたという話がある。一九三五年、上海を訪れた増井経夫氏に、魯迅は「東京に帰つたら、西郷隆盛に関する本は何でもいいですから、集めて送つてくれませんか」

とたのんだそうである。⁽⁵⁾しかし、魯迅は翌年亡くなつたこともあり、彼の作品中に西郷に関するものはないようと思う。

このようなほんの一、二例にすぎないが、いつたい西郷のもつ何が中国人の心をひきつけたのであろうか。そこで清末から一九三〇年代にかけて中国における西郷觀、西郷像の軌跡をさぐり、西郷が中国近代史、日中関係史にどのような影をおとしていたかを考察したい。それは中国人の明治維新觀でもあり、彼等の一種の日本近代化論ともいえるからである。

(一) 変法派の西郷論

管見では西郷に言及した古いものの一つは初代駐日公使何如璋の文書である。⁽⁶⁾彼は一八七六年冬に日本派遣を命ぜられ、翌年春、出発しようとしたが、西南戦争のために遅れ、九月に北京をたち、上海から日本に向つた。彼は次のように言う。

この晩、会館にとまり、会食する。談が乱事（西南戦争）に及ぶ。乱の首領は西郷隆盛で、薩摩の人である。兵をよくし、廢藩の時、勤王を以て陸軍大将となつた。「台蕃之役」は西郷がその主謀者である。役が終つて征韓論がおこつたが、議に敗れ、官を辞して、薩摩に帰り私學を設け、不逞の徒を集めめた。今春減賦助奸を名として、

鹿児島で乱をおこす。九州騒然となる。日本陸海軍すべてが派遣され、八ヶ月をかけて、やっと平定できた。費用五千万。いうまでもなく、こここの「台蕃之役」は西郷従道の苦である。隆盛と混同している。ともあれ異国の同時代人として最初の西郷論である。西郷に論評を加え、それを自己の政治思想の立脚点として、実践的にうけとめはじめたのは変法派をまたなければならなかつた。

康有為の著名な「日本變政考」は明治元年から一〇年までの日本政治史を編年体でまとめたものである。これには明治一〇年の西南戦争についての言及はない。ただ「一月一三日、合祭西南戦没者乎東京招魂社」と簡単にふれてゐるにすぎない。それどころか、明治一九年七月一三日の項に「海軍大臣西郷隆盛奉命巡視歐州之海軍」とあるところをみると、これも従道と隆盛の混同である。一八九八年四月一七日の保国会第一次集会の演説では、日本の変法、維新の功労者として、大久保利通、岩倉具視、坂垣退助、三条実美、大隈重信等の名をあげているが、西郷の名はない⁽⁸⁾。それらから判断すると、康有為は一八九八年の変法時期には西郷についての知識はほとんどなかつたといえよう。たゞ、ずっと後になって、すなわち一九一三年の「中國顛危談在全法歐美而尽棄国粹說」では、「今日、人の議論はなお一師之説にひたすら學ぶことを欲し、一師はその弟子達に教え、すべること欲している。そつして後に、情義が親しくなり、教誨が篤くなり、道徳が磨かれ、志節を激發させる。昔は吉田松陰、西郷隆盛、山鹿素行、後藤象次郎の学風がこれであった。彼等から学んだ者は皆、志と行は遠く高く、名節を磨く、明治維新的成功は皆、これに頼る」と述べ、西郷を教育、子弟養成の視点からふれる。しかし、教育者とその学風という範疇で、吉田松陰と山鹿素行を並べるのも、いさゝか問題であり、また、後藤象次郎も同様に列挙できるものだろうかとの疑問も残る。

こうした叙述から考えれば、康有為の西郷についての情報は不足しており、いわば明治維新を学ぶという過程で、そこに登場する維新の

功労者の一人という程度の知識であつたといえよう。

明治維新から学び、その変革の源泉を求めるという点では、康有為の弟子の梁啓超の学識が必要であった。彼の戊戌政變記の卷三では、愛國之士の必要を論じ、國の利の為には己の身も名も捨てて之に当ること、之が愛國の士であり、これが吉田松陰であると激賞する。ついで、「即ち日本について論すれば、幕末藩士、一人として急激之徒でないものがあろうか。松陰、南洲とりわけ急激之巨魁なり。試みに問う、この急激がなければ、明治維新は成就したろうか」と論じている。吉田松陰と西郷隆盛の二人に注目することは梁啓超の明治維新認識の鋭さを示すものといえよう。これより先、一八九七年（光緒二二）つまり戊戌変法の前年に「記東俠」を書いている。「東俠」すなわち「日本の俠」の意味である。梁は日本が明治維新を達成し、イギリス、フランス、ドイツ等の国にせまり、「豪傑の國」となったのは何故かと設問し、その原動力の一つに俠の精神があつたとする。「東俠」である。そこで、日本の安政年間から慶応年間にかけての俠を求めて、岡千仞「尊攘紀事」、蒲生重幸「偉人」等を読んで、具体的な「東俠」を知るようになる。まず

吉田寅次（郎）、佐久間（象山）、清河八郎、牟田尚平、中山忠愛、平野国臣、真木保臣、小河一敏、大久保（利通）、堀（真五郎？）、有馬（新七）、田中河州（河内介）（孤内は引用者が補足）を列記する。吉田松陰以下すべて武士であり、彼等のほとんどが刑死、暗殺、横死、斗死等によつて、志半ばにして、悲劇の最後を遂げたものばかりである。梁啓超はこうした武士の世界だけに俠の精神、俠の行為があつただけでなく、僧侶、医師、女性の中にもそれがあつたと述べ、増月照、医師駒井路庵、野村望東尼をあげ、三人の略歴を紹介している。そしてこの増月照と西郷の関係、二人の入水自殺、前者の死と後者の蘇生の経過にもふれ、結局、西郷はこの体験によつて、その後の変法の魁の途を見出し、やがて明治政府の要人として、政局を

動かすようになったのである。ここに西郷が「東侠」の一人として明確に指摘されている。彼のこの維新変革、侠への認識過程は同時に中國の伝統への回帰、再認識をよびおこす。梁は侠の精神、侠の行為は、古くは中國にもあり、すなわち「史記・游侠列伝」に載つてゐる荆軻、聶政、朱家、郭解等がそれである。

梁啓超のこうした侠の認識過程は次のようにいえるだろう。一八九七年という变法前夜、現状の改革を志向し、その鑑を隣国日本の維新変革に求めた時、維新変革の原動力に侠の精神の存在を認めた。それに触発され、伝統への回帰、伝統の読みおこしとなる。したがつて、梁啓超は侠の概念規定を特にしているわけではないが、それは「史記・卷一二四游侠列伝卷六四」の「其行虽不軌於正義、然其言必信、其行必果、己諾必誠、不愛其軀、赴士阨困、既已存亡死生矣。而不矜其能、羞伐其德」（その行いが正義にもとつても、その言は必ず信用できる。その行いは必ず果敢で、一旦受けたら誠実にやりとげる。その身を惜まず、人の災厄に赴き、死生存亡の危険にさらされながら行動することがあつても、自分の能力を自慢することをせず、自分の徳を誇ることをはじるのである）によるものと思う。

この古典的定義を伝統的解釈としてうけとめ、それを侠のプロトタイプとし、その上に、時代の要請、必要に応ずる何者かを附与する。つまり侠を歴史的に規定された一つの精神としてとらえようとする。すなわち、一九世紀末の中国社会の危機からの脱出、矛盾にみちた社会の変革、革新の為に、身を犠牲にしても、実行する精神的原動力を侠の精神に求めたのである。しかも日本の例のように侠の精神を男女や職業の別をとわず、すべてに共有し得る徳目として称賛している。まさに一八九七年という中国的民族的危機感から生れたものであろう。

そこで梁啓超はこのようないい處を前提として、洋の東西を問わず、具体的な政治、思想上の変革・革新の歴史過程の中から実例をあげる。これは西郷像をより広く世界近代史の中に位置づけることにな

る。すなわち一八九八年（光緒二八）の「鉅革」、「論宗教家与哲学家之長短得失」および「敬告當道者」の三論文がそれを示してくれる。^[14]

以下にその大意を紹介してみよう。

「鉅革」は改革と革命についての論議である。すなわち明治維新は革命であり、藤田東湖、吉田松陰、西郷隆盛の三人を革命的人物とする。この論旨は「論宗教家与哲学家之長短得失」でさらに深められる。テーマから想像されるように、梁は宗教家と哲学者は相反するタイプであるとする。歴史上、大業をなした英雄には宗教家が多く、哲学者はすくないとする。私流にいえば前者は思想上のリーダーで、所謂教祖的タイプで、現状を打倒、破壊する行動の人である。これに対して、後者は実務家で、合理主義的なタイプで、体制づくりに才能を發揮することになる。つまり侠とするのは前者である。梁啓超が宗教家とみる人物はクロムウエル、ワシントン、リンカーン、マッティニー等であり、日本人としては大塩平八郎、横井小楠等であるが、とくに西郷隆盛が傑出しているという。梁はとくに西郷が禅を学んだことに注目している。この禅を学んだ意味づけについては、梁はとくに言及してはいない。それは明らかではないが、内村鑑三の「彼（西郷）もまた仏教のストイック的型態ともいべき禅学を少しく研究した。これは後半彼が友人に語る所によれば『余りに強い我が情を殺す』ためであつたと謂ふ」ものではなかろうか。禅について、深入りする能力がないので、先学の考察を引用すれば、荒木見吾氏が「元來禪とはこのなま身の人間が、世俗的なあらゆる束縛や障礙を断ち切つて、前後左右自由な振舞い得る絶対主体の確立を目指すものであり、開けびろげの悟りを説くが故に新しい歴史の担い手として登場した士人の心情に浸透し得たのである」という意味での禅であろうか。梁のいう禅は「士人の心情に浸透」することを示唆していると思ふ。ところで、内村の「代表的日本人」は最初英文で書かれ、一八九四年（明治二七）一月に公刊され、改訂版は一九〇八年（明治四一）

であった。したがつて梁啓超がこれを読む可能性はあつたと思われるが、確めてはいない。ともあれ、梁の西郷觀は内村のそれと符合するところが多い。例えば梁は西郷に宗教的心情を見い出し、西郷とクロムウエルを並列し、宗教的心情の共通性を指摘するところをみると、内村が「彼（西郷）の偉大はクロムウエル的偉大であつた。ただ彼にピューリタニズムは無かつたために、彼はピューリタンではなかつただけであると思う」という一文を想起せざるを得ない。なお梁は自己の師である康有為と同志である譚嗣同についても、彼等二人が仏教を学んでいたことが読書人の中にはアッピールし得たという意味の指摘をしている。こうして梁啓超のいう俠はさらに教祖的性質を帯びるようになつた。

「敬告當道者」論文は変法時期、清朝当局への批判で、長論文である。その一節で、イタリアのマッティニ、フランスのローラン夫人と吉田松陰の三人が近世の激烈な破壊家の代表であると述べ、現在の為政者はまず一九世紀の政治史をよく学ばなければならぬ。さらに厳しく次のようにもいう。伝記でクロムウエルと西郷隆盛を讀めといいたいが、諸君（為政者）はきっと耳をふさいで逃げてしまつだらう。そこでせめてビスマルク、カブール、板垣退助等の伝記を読んで欲しい。それも全部は無理だらうから、その一部でもよいから讀んで、先賢に学びなさいと、辛辣である。彼等の伝記がある筈だが、定かでない。以上の梁啓超の俠、西郷論は一八九七年、一八八年という変法政治過程絶頂期に提起されていたのである。

↑先に西郷、月照入水事件に関心がよせられていたと述べたが、この入水事件につき、心を強くひかれていたのは譚嗣同である。戊戌政变によつて敗れ、五人の同志とともに從容として、死に就いた譚嗣同は、この月照と西郷の関係を自己の処すべき鑑としたと思われる。すなわち譚は政变後二日の九月二二日、日本公使館に難を避け、亡命をはかけていた梁啓超を訪ねて、次の様に告げてている。

行動しなければ将来を図ることはできず、死ななければ聖主に酬いることはできない。南海（康有為）の生死が不明ないま、程嬰と杵臼、月照と西郷の役割はわたしとあなたで分け持とう。
史記「趙世家」の故事——程嬰に對して、報復のため、生きて趙氏の孤児を守れといつて死んだ杵臼は「死ぬるは易く、生きるは難い。我等は易きに就こう」と述べた——と西郷、月照入水事件に自分の心境を記したのである。

譚嗣同のこの「尽己」つまり「敢死之風」は、その後の同郷の陳天華、楊毓麟等の死につながるものがあつたのではなかろうか。高田淳氏は、譚は己れを滅ぼして、他の為につくす仁俠を尊んだことを指摘する。譚は少年の頃から、大刀王五（王正誼）という人物から武の道を指導され、自己犠牲の精神を学んでいた。その上秘密結社仲間を流浪し、孔子廟が全く腐敗しているのにくらべて、在理教のような結社が民衆の利益に役立つている様をみ、また同時に、墨子の「尽己」の世界を学ぶことによつて、譚の俠は次第に形成されたといわれる。したがつて、譚の明治維新論この俠の一点にか、わることになる。譚はいう。「（明治維新は）、游侠の徒の剣を帶びて行遊し、悲歌叱咤し、殺人報仇した俠気によつて成った」と。まさにこの俠気の人が西郷隆盛ということになる。ちなみに高田氏は「吉田松陰に似ているが、譚嗣同の任俠論が先秦戦国時代の墨家精神の継承であるところに、中国近代思想史における譚嗣同思想のもつ転換の意味があるのである」と述べている。

以上のように、康、梁、譚の三者の西郷認識をたどり、ここにいた入水事件につき、心を強くひかれていたのは譚嗣同である。戊戌政变によつて敗れ、五人の同志とともに從容として、死に就いた譚嗣同は、この月照と西郷の関係を自己の処すべき鑑としたと思われる。すなわち譚は政变後二日の九月二二日、日本公使館に難を避け、亡命をはかけていた梁啓超を訪ねて、次の様に告げている。

のシンボルとして掲げた。譚嗣同になると西郷像を自己の生死の行為に直結させたのであつた。

かくして、明治維新—西郷像→中国近代の関連が、俠の精神を媒介として成立し、日中両国連帶の精神的場が設定されはじめたといえよう。この関連は中国側からいえば、日本への留学生の増加、日本への関心の深まり等によつて、梁啓超個人あるいは変法派という一政治的セクトに限定されるものではなく、変革・革新をめざす青年、知識人に共通するものになるのであつた。たゞ、日本側からいえば、すでに日清戦争前より、対華政策の実施、とくに諜報任務の為の特務調査活動家の戦略として、この俠なるものが注目されていた歴史事実のあることだけは附言しておきたい。⁽²⁰⁾

(二) 革命派と西郷論

まず中国革命同盟会の機関誌「民報」をはじめとして、革命派系といわれる出版物に掲載されている西郷論を検討しよう。

その一つとして、「民報」三号に汪精衛「希望満州立憲監聽諸」が載つている。これは一九〇五年の所謂五大臣出洋考察憲政についての批判である。すなわち載沢等が訪日して日本の憲政を学ぼうとしているがそれは無駄である。何故なら、日本の倒幕は政治上の革命であり、その後も様々な努力がなされ、その上なお西南戦争を経過しさらに自由党の活動等があつて、そこではじめて憲法発布にまでこぎつけたのである。つまり立憲政治の前提として、こうした政治的経過が必須であつたと主張する。この汪精衛の論文には西郷個人に対する言及はないが、たゞ西南戦争が立憲政治成立過程で不可欠であったことだけが述べられているにすぎない。⁽²¹⁾

革命派の西郷論のもう一つは梁啓超が強調した俠の尊重に関連してである。端的にいえば梁と同様に俠の典型に西郷を見るのである。そ

の経過についてみたい。例えは革命派系の雑誌「江蘇」第五期（光緒二八年七月）に「国民新靈魂」という社説が掲載されている。主旨は「新國民魂」を中国にどうしたら育成できるかという自問自答である。つまり、五つの新しい魂＝国民魂が創造されなければならない。その五魂とは山海魂、軍人魂、游侠魂、社会魂、魔鬼魂である。山海魂は山野と海を探険、航海で挑戦する冒險魂であつて、その昔張騫、鄧和等がそうであつたが、現在、南北極探険隊には中国人は参加していない。

軍人魂、これは今日の中国にはない。従軍することを悲しみ、勇んで征くことはない。死を願つて、生還を期さない魂が必要であり、これを育成しなければならない。

社会魂とは平民魂の意味である。現在は上、中等階級が下等を圧迫し、下等は経済的に苦しんでいる。つまり下等社会による変革実現の為の魂となる。

魔鬼魂、魔鬼とは人をして義和團のように烈しく燃焼させる魂である。秘密結社の紐帶關係のシンボルを示すものである。以上の四魂と並んで游侠魂があげられている。およそ次のようである。

俠は儒に反するものである。儒は死容であるが、俠は生氣が多い。儒は空言であるが、俠は實際を重じる。儒は禍福をはかるが、俠は利害を忘れる。儒は故常を踏むが、俠は創異が多い。中国を今日のようにならぬのは儒の罪である。俠は儒に反するものであり、俠は善であるが、儒こそ惡の根源である。

非常にラディカルな叙述であり、儒を徹底的に糾斷する。この俠を儒の対立するものとして、とくに儒を惡の根源とするような認識は梁啓超にはない。しかし、この主張は韓非の「儒以文乱法、而俠以武犯禁」の古辞と無縁ではないかも知れない。ともあれ、游侠魂を他の四魂と並べて、新しく国民魂を創造するという主張は重要であろう。されではこの論理で、俠なる人物を歴史上に求めるはどうなるか。「史

記」の朱家、郭解、王公、劇孟、「漢書」の荆軻、董政、要離、倉海、「後漢書」の李鷹、杜密、范滂そして明代の顧憲成、高攀龍等がそれである。「史記・游俠列伝」に限つては、梁啓超と同じである。しかし儒に対しても全く異なる姿勢であった。いうならば変法派、革命両派の立論と展開をくらべると伝統思想の継承で、共通面と異質面があるということであろう。

「游俠魂」はこうした俠の概念を強調しつつ、中国以外の諸外国に俠的具体例を求めている。すなわちフランクリン、ダントン、ローブスピエール、マッティニー、ガリバルディー、コシューシコ、バークニン、西郷隆盛、宮崎滔天等である。概していえば近代国民国家形成期の革命指導者、民族独立指導者達である。梁啓超があげた人物と共にするものにマッティニーと西郷隆盛がいる。ガリバルディやコシューシコ等の独立運動の指導者は変法派ではあげられていない。宮崎滔天

がフランクリンやローブスピエール、はたまた西郷隆盛等と同列にされているのは、過大評価の感があるが、「三十三年之夢」一つとっても、というより、この著作があるが故に、中国革命派にとつて、最も心を許す友人であり、最も身近かな人物中の代表的な俠の持主といふことになる。

確かに滔天自身が「侠客と江戸児と浪花節」「浪人の本義」等で俠を愛し、俠を称賛している。後者は浪人タイプとして、侠義的浪人をあげている。その著「狂人譚」も俠＝狂として、俠の延長として書かれたものであろう。²⁴⁾孫文も滔天の「三十三年之夢」の序文には滔天を「今の俠客」とたたえている。中国革命派の信頼は眞の俠として、彼の俠的行動に寄せるものであつたといえよう。

さらに游俠魂は「アメリカ人に俠骨がなければ独立はできなかつたであろう。フランス人に俠心がなかつたら、王権打倒の革命はできなかつたであろう。日本男子に俠腸がなければ攘夷討幕維新の事業を成し遂げ、一躍一等国地位にはつけなかつたであろう」と述べ、俠骨²⁵⁾

俠心、俠腸と全身これ俠こそが変革の源泉であることを強調する。最後に次のよう述べる。

一八世紀以来、中国に俠があれば、今日のようなことにはならなかつたであろう。國は儒で亡び、俠で興る。人は儒で死に、俠で生きる。……共和主義、革命主義、流血主義、暗殺主義等すべてに游俠主義がなければ之を担うことができない。それ故、私は中国にこの游俠魂をそそぎたい。俠こそ救國、興國の源泉であり、儒は亡國である。

以上が游俠魂の概略である。矛盾にみち、腐敗しきった清朝支配体制、その諸悪の根源としての儒、それに俠を対置させ、「新国民魂」を養成しようとする。俠は儒と対立するだけでなく、救國、民族的自覚のイデオロギーとしてうけとめられている。西郷像はこのコンテキストの上に浮び上がつてくる。

こうして俠の精神は共和主義からテロリズムまで、現状破壊と再生の原動力ともいいうべき位置をしめた。したがつて、革命派系出版物に「崇俠論」が掲載され（民報二三号、揆政）、「公俠」、「楚俠」とかのペナンームで詞、詩が発表され、救國、愛国が提唱される。²⁶⁾

さらに「崇俠」は「尚武」にも拡大され、青年、知識人、留日学生等の行動のシンボルとなり、彼等の政治行動を促進せしめる。²⁷⁾次に同盟会の領袖の一人であつた章炳麟が西郷に言及していることを紹介したい。章は次のように述べている。

「日本は維新以来……国勢がようやくおこり、法律もしだいに備わる」と、臣民はその軌跡の中におさまってしまい、多くの高官の中に西郷隆盛のよくな剛厳直大な人物を求めて、もはや見ることはできない。以前は軽俠自善であつたが、士人には奔放自由なものがしばしばいた。中江篤介、福沢諭吉などは、まさに東方の師表と仰ぐべきである。いま日本の学術は以前よりすぐれているが、政府の御用を策すものばかりだ。高貴利禄のためのみ働くものばかりではない

が、日本は維新から僅か四十年で、善もこんなに進んだが、悪もこんなに進んだのである。

日本の維新以後の歩みを文明開化、近代化という善の側面のみを強調する論調に対し、章は開化、進歩の過程にも、悪があり、善と悪、樂と苦はいつしょになつて展開するものであるという。これには一個の西郷論というより、日本近代の歩みに対する厳しい批判であるといえよう。

もちろん西郷について、簡単ではあるが、称賛している。この西郷を「もはや見ることができない」の一言には、章炳麟の日本近代への批判がこめられている。西郷の死が章炳麟をして、日本近代の行末に不安を抱かせることになった。

さて西郷隆盛といえば、通説では「征韓論者」として知られている。

したがつて当然、この点に言及しなければならない。そこで明治期、中国人留学生が、この西郷の征韓論をどの様にうけとめているかを述べておきたい。

明治時期、法政大学に野村浩一という講師がいた。彼の講義を聞いた中国人留学生は、この講義ノートをもとにして、彼等自身の「日本明治維新小史」（明治三九年）を編集し出版している。大変興味ある冊子で、すでに別誌に紹介したことがある。その一節「征韓論」によると、日本の征韓論には三種あつて、その一つは副島種臣の強硬論で、日本が列強に軽視されない為に、朝鮮に断呼たる態度をとるということである。次に後藤象次郎のように内政の危機を外に転嫁して解決を求める為にとられる征韓論があり、もう一つは西郷のそれであるとする。西郷の征韓論は名分を以て対応しようとする。すなわち自分一人で韓国王に会い、もし信にもとるならば兵を出すというのである。つまり始めから、何でもかんでも出兵するのではない。話し合ふことを主張しているとする。したがつて、明治末期の中国人留学生には、すくなくとも、西郷に積極的侵略をめざす征韓論者というイメージはない。

この詩は松浦玲氏の研究成果⁽³³⁾によると、一八八四年（明治一七）には作られていた。勝海舟の西郷を悼む心情は、西郷の死の直後より「亡友帖」を板行して、知人に配布し、西郷を偲んでいた。この勝による西郷の復権過程での詩作であつたという。中国人留学生が西南戦争と西郷の死をこのよくな勝の詩で結んでいることには興味を覚える。

俠の精神を媒介に西郷隆盛と共に鳴した革命派の一部には、その関心が西郷の活動の基盤である薩摩藩にもむけられた。すなわち湖南省系出版組織の一つに「湖南編訳社⁽³⁴⁾」がある。その「湖南編訳社叙」で次のようにいふ。

四〇年前、尊皇討幕が成功し、国是が定まつたのは卓越した指導者

がいたからである。彼等は皆、吉田松陰の門人である。その後、福沢、加藤、中村、中江等が続き、西洋文明を翻訳、紹介したので、三島（日本）に西欧思想が横溢した。十年もたたぬうちに、民気が民智が大いにのび、国勢が日にさかんになり、立憲政体が成立し、六ヶ列国の仲間入りをした。安南、ビルマが滅亡し、支那、朝鮮が弱化したのに、この小さな三島の四千万人が何故そうならなかつたのか。それは誰の力によるのか。答は吉田（松陰）、西郷（隆盛）、福沢（諭吉）の功によるのである。吉田、西郷、福沢等皆一介の書生、彼等は慷慨して事に任じ、激情風発して、維新の大業を成就したのであつた。

吉田松陰、福沢諭吉について、清末中国知識人、青年そして留日学生の関心如何なるものであつたかはさらに専論を必要とする。今後の課題としたい。先の文は次のように続く。

湖南は尚武を好み、薩摩の風がある。日本建国は薩摩に依存したが、将来の支那も湖南に頼らんとするものである。

すでに多くの研究者が指摘しているように、中国近代百年の政治変革の歴史を見る時、湖南省の占める位置は大きい、常に全中国の波頭に立っていた。その自尊の精神の表現が、日本にたとえて、湖南省こそ中国の薩摩たらんとする信念の披瀝になる。その自己主張構築の論理の原点として、西郷が存在していることはいうまでもない。湖南省の機関誌『游學訳編』がそれを証明している。例えれば在日留学生の名で『致湖南士紳諸公書』⁽³⁶⁾が掲載されている。この文は蔡鍔が一九〇三年に書いたと思われる。

今維新的志士の名を数えあげると、三藩（長州、薩摩、土佐）の志士をあげないわけにはいかない。この藩の志士の中でも、薩摩の西郷南州翁を推さなければならない。

日本で陸軍士官学校で学んでいた蔡鍔は梁啓超との結びつき、黄興

との関係も深く、かつ後の護国軍の領袖として、反袁世凱運動を指導したのであるが、この彼の政治的行動の出発点に西郷がおり、湖南省に薩摩論があつたことは興味深い。すなわち彼は次のように述べる。

湖南省は中国での薩摩にならなければならない。日本は小さく、また薩摩は湖南にくらべて小さい。しかし、日本は變つてしまつた。中国は大邦であり、故に湖南は大薩摩である。だがまだ中国を変えることができない。湖南には屈原、王船山等の人物が輩出している。湖南が變れば中国はこれに続くと信ずる。それ故、同志は団結して起ちあがろう。

とかなりの調子の高い檄文である。ところでこの『游學訳編』は、第三冊から五冊にかけて、「日本第一人述」（明治柱石伝及明治百傑伝）を連載している。柱石、百傑となるが、全く西郷だけの伝記であり、百傑どころか一傑のそれである。つまり、西郷こそが、日本が中世以来の腐敗を一掃し明治維新を創立した第一人者であると絶賛する西郷個人崇拜物語といえる。湖南派の西郷への思い入れは、もはや心酔ともいうべきものになつたようである。

以上、二章にわたって、変法、革命両派の西郷隆盛觀を紹介したが、両派とも、西郷の維新および明治政治史上の実践、役割等を具体的な史実を根拠にして、追及するというものではない。したがつて、西郷の実体とは離れ、実像とは言い難く、時には主観的で、恣意的ですらあるといえよう。だが、むしろ重要なのは、彼等が清朝支配体制の改革、辛亥革命等の政治的変革の実践者の立場で、変革の理念を求めて、国境をこえて、西郷を同時代、同次元の先駆として受けとめ、継承している点にあつた。すぐれて政治的論議といわなければならぬ。彼等のこの対応が、西郷像を通して、日中両国関係上、両国有志の精神的、思想的共通の場をきづきあげることになつていたのである。

ついて考察をすすめたい。

(三) 黄興と西郷

「民報」創刊一周年慶祝大会が一九〇六年一二月二日、東京で行なわれた。来賓の祝辞に統いて、主催者側として、黄興が挨拶した。その一節に「ヨーロッパの革命では、学生が大きな役割を果した。日本の革命でも、西南之役の西郷隆盛が率いた義軍は鹿児島私学校の学生である。これをみると、日本の革命事業も学生が担っている」とある。

文脈をみて西南戦争に好意的であり、かつ学生が参加することで、革命的役割をなったと評価する。果してこの評価が成立するかどうかは疑問になると思うが、ここでの集会は「民報」発刊一周年をむかえて、革命の気運をもりあげようとしたのであり、しかもその参加者に留学生が多かつたので彼等へのアジーーションであつたと受けとることができよう。

一九〇九年（明治四二）一月、宮崎滔天の案内で、黄興は鹿児島を訪れ、西郷の墓参りをしている。その時、次のような詩を読んでいる。⁽⁴⁰⁾

八千子弟甘同塚
世事唯爭一局棋

梅鋗当年九州錯
勤王師不撲王師

黄興は囲碁が大好きで、しばしば日本の友人を相手にお手合せをしていたようである。したがつて囲碁の勝敗に西南戦争の懐いを託するのは如何にも黄興らしく思われる。こうした黄興の西郷への追慕ともいうべき心情は、同時代の日本人、とりわけ所謂、対外硬派の有力者と共鳴する面が多かつた。たしかに身長約一六〇センチメートル、体重七五キロという容姿、風貌そのものが西郷を彷彿させるものがあつたといがいない。そうした点を同時代の日本人の黄興観から紹介してみたい。

池亨吉は「（黄興）は二十八才の時、長沙の郷里に帰り、単独にて

中村：中国近代史における西郷隆盛像

私立学校を開いた。其目的は云ふ迄もなく、革命党を湖南の青年子弟に教授し、以て今日の用に供へんとした者である。一寸西郷南州翁の私学校と云つた様な格である」と書いている。⁽⁴¹⁾もちろん、明徳学堂は黄興が開いたわけではない。彼はそこで教師として、歴史、体育等を教えていたのである。ともあれ、黄興と交友のあつた日本人はおしなべて黄興を中国的西郷隆盛という。以下その実例をあげよう。

黄興が死亡した一九一六年一〇月三一日直後の各新聞はそれぞれ競つて黄興と交際のあつた名士達の思い出を掲載している。例えば内田良平、古島一雄等は皆「実行の人、日本をよく解して、西郷南州崇拜の士」⁽⁴²⁾「一口で彼を評せば底力の知れぬ丁度我が西郷南洲の如き人物であった。彼は平生から深く南洲に私淑し、南洲の経歴言行等に就て細大と無く調べて居つたが、彼の南洲に髪鬚たる偶然で無い」と語っている。

一月一七日、芝青松寺の追悼会でも「喪我南洲」の輓詞が貼られていた。⁽⁴³⁾また美和作次郎氏談として次のよくなエピソードも紹介されている。

丁度亡命時代で寓居に頭山、犬養、副島、古島と云ふ様な諸豪を招いて碁会を催した。其時一寸した事から乃木大将殉死の話が出て木堂氏は頭山と黄と二人を顧みて二人とも西郷崇拜だから世話に云うのではないが、自分は乃木よりも西郷の方が趣がある様に思ふ。乃木は修養して彼れ丈になつたのであるから我々でも真似れば真似られる。併し西郷の方は真似たくても真似られるものではない。二人共「誠」の人である事は同じだが、西郷の畠から乃木は出るが、乃木の畠から乃木だけで西郷は出ぬ。詮り乃木は小乗で西郷は大乗だと説破すると、黄は飛上がつて其通りですと喜んだ事がある。⁽⁴⁴⁾以上のよくな事実からみて、黄興の西郷崇拜は非常に強いものであったといえる。したがつて「游学訳編」に掲載されている西郷伝や、前述したよくな薩摩＝湖南説には、この黄興の西郷觀と何等の相互関

連があつたと思われる。

ところが中国の西郷・黄興にとって、そのこと自体が苦況に身を置かせることになった、第二革命に敗れた黄興は日本に亡命した。一九一三年七月三〇日、南京で静岡丸に搭乗し、香港に移り、八月四日、三井物産の石炭船第四雲海丸で門司に入港という経路をとった。この時、南京領事船津辰一郎は冷酷にも黄興は逃げるのをやめて、「城ヲ枕ニシテ金陵ノ露ト消ユル如キコト」を望んだ。というのは日本政府が黄興の亡命を認めると、中国政府との関係が厄介になる、したがって、出先外交官は西郷が城山で死んだように、この際黄興も南京で死ぬべきだというのであった。この非情ともいうべき対策は、一部のジャーナリズムにも共通の論調があつた。忽堂野人「死せる孫黄と生ける孫黄」では次のようにいふ。

(黄興は)平日西郷南洲の人となりを慕へりとこそ聞くが、南洲の誠忠六節は今改めて言ふをまたず。彼は其壯年嘗て一知己月照の為めに海波の中に殉死せんとしたりにあらずや。又其晩年私学校子弟の為めに終に城山の叢中に殉死したりしにあらずや。しかも黄や今果して如何。

黄興の西郷崇拝を逆手にとつて、彼は南京で死ぬべきであつたことを主張する。そして、死を選ばなかつた黄興に対して、さらに追討ちの批判をくわえる。すなわち「黄興と南洲を対比せんは、味噌糞を一緒にするものなり。……大将が真先に逃げ出して、まず自全の計を為すこと苟も節義を解する者の深く愧づる所、南洲を引合に出さんは先哲を辱しむるも亦甚し」と論難し、終りに中国には「三十六計逃げるにしかず」という兵法の極意があるのだから、黄興を「支那人らしく支那人として論ずべし」と糾断した。黄興は「贋南洲」となり、味噌糞の糞となり、亡命は「斯く迄堕落」の行為になり下つてしまつた。

対応していたかは明らかでない。たゞ、その一端をうかがえる資料と

して、山中未成(山中峯太郎)が、後になつて——黄興病死の際——語つた次のようない出がある。⁽⁴⁸⁾

黄氏は僕達が力説する南京防守策を如何にしても承認しなかつた。其の黄氏は日頃我が南洲翁に私淑していたのが、「城山の西郷さんと私の立場が違ふ」ともいつたりした。而して其の夜の十一時南京城の神策門から獅子山砲台の北を廻る単線鉄路に密かに巨輪を投じて城外に奔り、幕僚の黄愷元と共に我が龍田艦に救はれた。龍田艦長は艦中に佩劍を黄氏に与へ、男子の死所を諷したけれども、黄氏は再び城山の西郷さんとは違つ趣をもつて其を退けたと言ふ。

宋教仁暗殺、第二革命とその敗北にいたる歴史過程及び、その歴史的評価、孫文と黄興の関係等については専論によらねばならないので、ここでは言及しない。黄興の日本亡命は再起をはかるのが目的であり、わざわざ切腹の為ではなかつた。南京で黄が死を選ぶより、生きて再挙をはかる方が袁世凱にとつて脅威である筈だ。たとえ西郷に傾倒する心情が強いからにせよ、死に急ぐ必要はなかつたと思う。しかし、亡命前の黄興の心境については、夫人徐宗漢宛の書簡に「私の負うべき責任をすべて尽すことができず、お前に遣す。お前は私の為に能くこれを負つてくれ、私をして国家に全力を尽くさせるのは、お前の責任であり、私一人の為ではない、故に敢て托したい」書き送つている文意をみると、遺書的な色合いが濃く感じられ、断腸の思いの黄興が想像される。ともあれ、日本側の黄興亡命への対応は俠の精神とは全くかけはなれ、相手の弱みにつけこむ冷淡な仕打ちであった。これは、註(20)で述べた日本対華政策初期の日清戦争以前からすでにあつた俠を功利的に理解して、諜報的特務調査に活用する政策が表面化したものといえるかも知れない。換言すれば、松浦玲氏のいう「幕府の霸道すなわち孫文のいう『西方霸道』に直結する道が確定した」時期が到来していることではなかろうか。

黄興は日本滞在一年足らずして、一九一四年三月アメリカにむけて

出発した。この年四月には大隈内閣が成立し、翌年対華二一か条が提出される。宮地正人氏は、大隈内閣成立によつて、国民主義的対外硬派が完全に純与党と野党に分裂し、彼等は「もはや民衆運動のアジテーターになりえなくなつた時期が到来したことを意味した」という。⁵¹ 国民主義的対外硬派とは「講和問題同志連合会に結集した人々および彼らの政治思想に近似した人々」としておこう。乱暴ない方をすれば、彼等の一部には西郷崇拜があり、滔天にみられる俠があつたと思う、ここに中國側からいえば民報六大主義の「日中國民的連合」の実現のための紐帶の精神があると期待していた。それは明確な理念、概念というより、漠然として両国当事者に心の通うものとして存在していたものであつたろう。しかし大隈内閣成立対華二一か条案によつて、紐帶の一方の日本の政治状勢の変化と他方では中国の民族主義的抗日運動の昂揚という事実が、西郷像及び俠の意味づけに新しい条件をつけることになった。

(四) 二・三〇年代の西郷論

日本の対華二一か条から始まる積極的な対中国侵略主義政策の強行に対し、中国のマルクス主義的視点からの日本近代への批判が厳しく提出され、仮想敵国として、日本近代の全否定の中で西郷隆盛も批判の矢面に立たざる。例えば山口一郎氏が紹介されている李凡夫「日本の過去、現在と未来」がそれである。

(明治) 政府内部の「守川派」の西郷隆盛と「進歩派」の大久保利通の間に尖鋭な対立がおこつた。〈征韓論〉を中心として、両派の対立が表面化した。頑固な西郷隆盛は征韓でなければ四十万「壯士」をおちつかせることはできない。しかるに大久保は「三千万人民のための福利を謀らなければならぬので、断乎反対」しなければならない。両派の争いは進歩派が勝利し、西郷、江藤、板垣等は下野

した。明らかにこの両派の背景は封建的因素とブルジョア的因素があり、事実上の封建勢力とブルジョア勢力の斗争である。以上のように前述したような俠としての西郷評価は全く消え去つてゐる。それは現在日本の主としてマルクス主義的立場からの西郷評価と符合するものであつて、侵略者、征韓論者の西郷が強調される。統いて、西南戦争について次のように述べる。

征韓を主張して容れられなかつた西郷隆盛は弁学の名で多くの不平分子を糾合し、一隅に拠つて、隠然として、明治政府の敵国となつた。一八七七年(明治一〇)、熊本で一万五千の兵が反乱をおこした。政府は全国の兵力(警察も含める)を用い、莫大な犠牲をはらつて、(死者六千、負傷一万)、やつと反乱を平定した。(隆盛は自殺した)。この戦で明治政府の「欧化」軍隊(多数は農民出身)ははじめて彼等の実力を發揮し、封建的武士に決定的打撃を与えた。西南戦争の結果、不平分子の騒乱は一段落を告げた。

論者の李凡夫は明治維新はブルジョア革命ではなく、絶対王制の成立とみており、西郷は封建反動として、不平武士階級の首領であつたと位置づけ、日本の維新革命の不徹底性が日本帝国主義の特殊性を決定したという。この日本近代への認識、西郷論はその後、中国革命をリードし、抗日戦争を勝利に導いた中国共産党の日本近代の認識にそつた西郷理解につながるのであろう。

一方、日本の侵略主義、膨脹主義の顕在化は、辛亥革命前から日本人を友として活動していた中国の青年、知識人達にも、衝撃を与え、民族的危機感を抱かせるようになつた、彼等からも当然、日本批判の論陣がはられる。そこにはかつての連帯のシンボルとしての西郷像は消え、却つて、批判の対象にさらされる。その例として、戴季陶、張繼、何天炯三人の連名による「日本国民に告げる書簡」を次に引用してみよう。

五十年前に開国と進取を標榜して立ち上つた維新の志士も、大陸侵

略を根本的政策と考えないものはなかつた。大木(喬任)氏の日露同盟による中国瓜分論や西郷(隆盛)氏の征韓によつて大陸をうかがう計略はその代表である。だから大陸侵略は日本の伝統的政策であり、一切の対華方針の基礎なのである。中国の国家および国民の利害が日本と共存できない原因はここにあるのだ。(傍点引用者)表題は「日本国民に告げる」と穩かであるが、内容は厳しい非難であり、糾断であつた。大陸侵略は日本の伝統であり、原点に西郷の征韓論があつたという。すでに両国の利害は相反し、共存できない段階に達したのであつた。ごくおおずかみに言えどもこの中国側の対日觀はその後の中国革命過程では継承され、一九四五年八月一五日までの主流となつていった。

しかし、一方では辛亥革命をピーコとする革命過程で、日本で学び、日本人を友とし、その協力を体験していた中国人の中には、明らかになつた日本の野望に對して、攻撃、批判をくわえつとも、他方では侵略国日本の方角転換に希望を寄せる忠告的發言が、二〇年代、三〇年代に入つても続いていた。端的な例は、一九二四年、神戸で行なわれた孫文の「大アジア主義講演」はそうであろう。孫文はこれより先、日本の侵略主義、膨張主義の野望に警告を与えてつゝも、「日本の明治維新は中国革命の第一歩であり、中国革命は日本維新的第二歩である。中國革命と日本の維新は、實に同一の意義をもつものである」と述べ、また「生を捨てて國を救う志士の仁」を強調する。と同時に「惜むべし、日本人は維新後強盛となり、中国革命の失敗を忘れた。それ日の感情は日に疎遠になつた」と主張する。まさにこの点にある。つまり孫文の論調、論示にそつとうな西郷論が二〇年代から三〇年代にかけて主張されていた。その例として、一九二七年出版された戴季陶『日本論』をあげることができる。前述したように、戴は十年前、

「日本国民に告げる書簡」の共同執筆者であった。戴は「日本論」執筆の契機は明治維新的大事業を成し遂げた日本人であるので、現在の中国が目ざす独立と統一を理解してくれるものと期待した。にもかかわらず、現今日本の日本政府はその期待を裏切つてはいる。すなわち田中義一内閣の山東出兵は中国の統一を妨害する侵略であると糾断する。しかし、その上で明治維新的流れをみて、この維新成功的原動力は日本人の「尚武の精神」であるとする。しかるに、田中義一内閣はこの「尚武の精神」を忘れた軍国主義の内閣になつてしまつた。これはけつして矛盾ではなく、尚武の精神の衰退が、かえつて軍国主義を増大させるのだという。ここでいう「尚武の精神」の尚武とは、清末軍国民教育会で主張されたそれと同様で、俠と通ずるものと考える。しかし戴は俠を用いない、むしろ二〇年代では、崇俠を後景におき、尚武を以て批判の原理とする。戴は維新の大成功の主力は薩摩藩であつたし、人物の点でも偉大な人物といえば西郷隆盛である」という。しかし残念にも西郷は殺されてしまつたが、彼こそ尚武の精神の持主である。それにくらべて、国家中枢の権力を握り、軍閥、財閥の基礎を築いた輩どもは、腐臭紛々たる長州閥の貧官どもであると厳しい。薩長对立史観ともいべきバイアスは感じられるが、軍人田中内閣批判の為、武士道を逆手にとつて、尚武を主張したのである。つづいて、個人の仕事の失敗がかえつて時代の成功の原動力となることも多いし、個人の仕事の成功がじつは失敗者の思想に沿していることも多い。たとえば、日本のここ数十年の歴史を通してみると、西郷隆盛がいい例だ。かれは現実には失敗したが、その後かれの抽象的人格は、日本民族の最近五十年の絶対支配者となつて、多くの事業がかれの人格の力で推進されている。また、かれに従つて失敗した土肥両藩のエネルギーは形を変えて、後の民権運動の中心となつたばかりでなく、その余光は今日に及び、日本既成政党のすべてを支配している。いっぽう、成功をおさめた長州藩は、今日、西郷の人格の前にひざまつかざるえないばかりか、民論の推移にしたがつて、政策を決定せざるをえないものである。事実問題だけをとりあげてみ

ても、西郷の征韓論はかれの死後十八年（すなわち一八九五年、日清戦争の年）にして実現し、死後三十年（一九一〇年 日韓併合）にして公然と目的を達した。かりに明治四年の段階で西郷の征韓論が通つていたとしたら、一大災禍を招いて、日本の維新の事業は御破算となり、西郷の人格も埋れたままになつたかも知れない。

内容は複雑で、理解しにくい点もあるが、文意は次の様だと思われる。すなわち、維新後、日本近代「数十年の歴史を通観」すると、その政治の諸様相の中に、すべて西郷隆盛の影がおちている。また誰しも、この西郷の影響あるいは恩恵を受けていることを無視できない。にもかくわらず、眞の西郷とは異なつてしまつてゐる。とくにこの一九二〇年代の日本政府、指導者にはそれを求めることはできないといふのであらう。戴のこの書に序文を書いた胡漢民の文章によると「この一節は余人による百の西郷への賛辞に匹敵する。たしかに西郷は王政統一の時代に謀反を起こし、反逆の大罪を負わされて死んだ。しかし死後数年にして、かれの銅像は上野公園にそびえ立ち、全国人民の崇拝を集めることになった。しかも、日本全国のどの銅像もこれに比肩しえないのである」というのである。

国民革命の進展、民族運動の激化、反帝国主義運動の昂揚という二〇年代後半になつても、以上のような西郷論が繰り返えされている。そこでの論理は「友情」ともいべき心情を心底におき、日本侵略主義への警告として、西郷像をシンボルとする。こうした日本論は、マルクス主義者、共産党系ではなく、むしろその多くは国民党系があることは知日家によつて主張されていた。しかし、この主張は少數で限定的ではあるが、一九三七年七月七日の全面戦争突入前後の時期まで継続していた。⁽⁵⁰⁾ 三〇年代に入つて、戴季陶と同様に、知日家として著名で、若い時に「新民叢報」に論陣をはつたこともあり、かつ軍人である蔣百里（方震）は「日本人——一外国人的研究」を書き、「眞に日本精神の美德の代表とするに足る人物がいる。つまり西郷隆盛だ。しか

し、彼は典型的に悲劇の主人公となつた。というのは、彼は彼に反対した敵に敗北したのではなく、彼の愛した学生に敗れたからだ」と述べている。「彼の愛した学生というのは、西郷の死後の日本かも知れない。西郷を悲劇の主人公と表現するように、彼に對して、敬愛と同情の氣持があることは確かであろう。美德の代表が西郷とするなら、西郷の死は美德を失つた日本となり、それ故に、残酷、野蛮な侵略日本になつて、中国を侵略するという批判のレトリックとなる。

冒頭、紹介した魯迅の西郷への関心も、こうした事情が背景にあつたのではなかろうか。まさに、この時期、一九三六年に、家禾『西郷隆盛伝』⁽⁵¹⁾が公刊されていることに注目したい。著者の家禾はこの一九三六年だけをとつても多くの日本論を発表している。いずれも、二・二六事件後の日本の政治、社会の動向に関する分析である。これらの時論を執筆する過程で、近代日本の形成期を追及する必要性が生じ、その成果が、この大著となつたと考えられる。まず、序文で「九・一八六事件後の日本の政治、社会の動向に関する分析である。これららの時論を執筆する過程で、近代日本の形成期を追及する必要性が生じ、その後、中国人民は覚醒した。多くの人は皆、前進するためには、目前の日本について認識しなければならない」と述べ、続けて、おおよそ次のようにいう。今日の日本の問題は軍部であり、軍部は政黨の領袖や財閥と密接な関係がある。彼等軍部の要人は「武士道」を提唱し、模範とすべきは西郷隆盛であるとしている。しかし現在の日本軍部がいう武士道は大西郷の精神とは本質的に異なつてゐる。「現段階の日本軍部領袖には西郷に及ぶべき人物は一人もいない。彼等『皇軍』軍人は立身出世を求め、西郷と大いに異なる。現在の日本は廢武士道の忠君愛國が横行し、明治維新の成功の精神である武士道ではない。武士道には「叛」があり、現在の中国にはこの「叛」の武士道が必要であり、繼承しなければならない。このために西郷隆盛の伝記を著して、天下に知らせるのである。以上序文である。本稿のまえがきで楊虎城が兵諫の例を西南戦争に求めたことを紹介したが、この西郷伝の出版は丁度、西安事件と同年であり、一脈通ずるものを感じざるを得ない。

しかも、この伝記の三分の二を占めるのが、西南戦争であり、その内容は詳細である。おおよそのように述べる。

西南戦争は三つの反政府運動の潮流が集約されている。すなはち、農民の地租改正に対する反対、徵兵制に対する旧武士層の反対、そして民権運動という三潮流である。西郷はその個性と信望によって、「反逆」の領袖、「朝敵」の罪魁として、つくりあげられているが、西郷の死は四十万士族のための死であり、政府に反抗する農民のための死であり、自由民権を斗う人のための死であった。しかし、西郷自身は自由民権に反対する立場であつたが、民権党と合作することにより、相互に心に期すところがあつたという。

今日の日本近代史研究の水準からみて、こうした西南戦争觀は必ずしも説得的なものではあるまい。本書を通じて、最も強調されているのは宮崎八郎等の協同隊である。「宮崎八郎についていえば彼の一族には中国国民党の領袖に対して、相当な関係がある。諸君は孫中山の著作を読むとしばしば宮崎弥藏、寅藏の名を見るであろう。彼等二人は八郎の弟である」と紹介し、宮崎一家の日中関係に果した役割の積極的意義を強調している。さらに周知のように宮崎八郎と中江兆民との交友にも言及している。以上のような事実経過を詳述して、結論的に宮崎八郎の西郷との交流は「主義は西郷と異なるが、政府を打倒する目的は同じである。西郷が政府にいる場合には背をむけることはしないが、今はこの専制政府を打倒することを第一と考えている」と述べ、八郎や協同隊の思想は西郷より一段と質が高く、自由民権主義である。しかし、行動の型は封建時代の慷慨激昂的であつたと指摘する。ないが、今はこの専制政府を打倒することを第一と考えている」と述べたが、兩者に通じるものとして、武士道の「叛」」「反權力」があつた。宮崎八郎がいつたといわれる「西郷に天下をとらせて、また謀反する」を想起せざるを得ない。⁽⁶²⁾ とともに、先に紹介した革命派系雑誌「江蘇」の游侠魂で、西郷と並んで宮崎滔天が侠の典型と称されていたことを重ねて指摘しておきたい。

むすび

以上、清末から日中戦争開始前後まで、中国側からの西郷像、西郷論を紹介した。中国の改革、変革そして日中関係発展の理念を西郷に求めて維新変革の精神的原動力に俠をみたのである。その認識過程で中国伝統の「游侠」への回帰から継承となり、彼等のめざす現状社会体制の改革、変革のモデルとしたのであつた。そのことは他方では孫文のいう「日本維新は中国革命の第一步、中国革命は日本維新的第二歩」の精神につながるものであり、日本・中国両国の連帶の紐帶になるものであつた。より具体的にいえば、同盟会の「民報六大主義」に掲げられた両国の国民的連合の精神であり、日本からみて、国民主義的対外硬派とのきずなともなり得るものであつた。換言すれば清末から十数年間の日中両国民の精神的接点として、西郷像は作用していたといえよう。

しかし、大隈内閣成立、対華二一か条要求というよつに日本の膨張主義政策の強行と中国側の民族主義的運動の昂揚という両国の矛盾の激化は西郷像に新しい条件を与えることになった。西郷は日本軍国主義、侵略主義の原点としての征韓論者であり、封建反動の首領であると糾断されるにいたつた。だが、それだけでは終らなかつた。

従来の連帶のシンボルとしての西郷像、俠の精神の主張は一部知日家によつて伝えられた。すなわち、辛亥革命前より、日本人に友人をもつ彼等は、侵略者日本を攻撃しつつも、その方向転換に一縷の望を托して警告、批判を主張し続けた。例えは、西郷は美德の代表であり、尚武の精神の持主である。しかし、日本はすでにこの尚武の精神を失い、軍国主義の増大を招いてしまつた。それ故に、尚武の精神の復権を願うという逆説的レトリックを通して、西郷像が主張されたのであつた。それはかつて、両国連帶のシンボルとして輝いた俠の精神の

残照にすぎなかつたかも知れないが。

(註)

(1) 統計がや、古いが、一九七二年六月二三日付朝日新聞夕刊は、国会図書館編『人物文献索引——法律・政治編』を引用して、西郷隆盛二十七点、乃木希典一二四点、伊藤博文八三点と記している。

(2) この点を指摘する文献は多くあるが、橋川文三「西郷隆盛の反動性と革命性」(『西郷隆盛紀行』、一九八一年朝日新聞社)を参照のこと。

(3) 司馬遼太郎・陳舜臣『対談中国を考える』(一九八三年文芸春秋社)九三頁の司馬氏の発言。

また、島貫重節『福島安正と単騎シベリヤ横断 上・下』(一九七九年原書房)にも、左宗棠は西郷の死を聞いて、「不世出の英雄をこのようにして亡き者にする日本という国は哀れな存在だ」と述べている。(上五七頁)出典は明かにされていない。

(4) 李云峰『西安事変史実』(一九八一年陝西人民出版社)三四五三四六頁、これによると楊虎城は蔣介石を釈放して二日後に、およそ次のように述べた。「今度の事件を説明するのに二つの故事がある。一つは中国古代の左伝にあり、他は日本の西郷隆盛のことである。西郷は封建体制を倒し、明治天皇が新政府を創設するのに役立ったが、天皇は新政府ができても憲法を發布しようとしたが、そこで西郷は兵を起こして、天皇に抗し、ついに後に天皇も憲法發布をし、いっぽうでは西郷を殺したのである。西郷が殺された時、二四〇人が割腹自殺をしたという。」

(5) 増井経夫「魯迅と西郷」(『歴史と人物』一九七三年二月)、後に『中国的自由人の系譜』(一九八〇年、朝日新聞社)に再録。これに

よると一九三五年から翌年にかけて中国を旅行された増井氏は上海内山書店で魯迅と会つたことを書いている。増井氏は約束をはたせなかつたが、何故、魯迅が西郷に関心を抱いたのかという理由を「魯迅さんのように生命をいとおしみ、力の行方を見通し、民族の将来に深い愛情をもつた人が、死にいそぎに共鳴するはずはなさそうである。もし何かがひらめいたとすれば、人が第二の創業に直面したとき、たとえようのない寂寥感、否定を通じて肯定になだれこんで行く人の心のやさしさ、さらに生命の限界を凝視するさびしさなどであつたろうか」と述べている。

(6) 何如璋「使東述略」(『羅森等早期日本游記五種』一九八三年湖南人民出版社)五一頁、さねとうけいしゅう編訳『大河内文書—明治日中文化人の交遊』(東洋文庫一八、一九六四年平凡社)一五頁

(7) 「日本變政考」は黃彰健編『康有為戊戌真奏議(附康有為偽戊戌奏稿)』(中央研究院歴史語言研究所「史料叢書」民国六三年)所収による。近年王晓秋によつて、テキストクリティーエクされている。王晓秋「評康有為的三部外國變政考」(『北方論叢』一九八四年六期)を参考照、その他山根幸夫「戊戌變法と日本」(『論集・近代中国と日本』一九七六年山川出版社)、彭沢周『中国の近代化と明治維新』(一九七六年同朋社)等も参照。

(8) 「京師保国会第一集演説一八九八年四月一七日」(湯志鈞編『康有為政論集』上・下、一九八一年中華書局)、この演説に登場する日本人名は吟味を必要とする。

(9) 同右の下、九〇二頁

(10) 梁啓超『戊戌政變記』(中国近代史資料叢刊『戊戌變法』I)所収。二七七頁

(11) 『飲冰室文集』(一九六〇年台湾中華書局)

(12) 原文は重幸とあるが、重章が正しいと思われる。また「偉人伝」も正しくは「近世偉人伝」であろう。

(13) 俠の概念については、歴史的変遷過程があると思われる。高橋稔氏によれば、魯迅の俠は「自己の信条を守つて『死』を目的として、行動することは徹底的に体制に反抗することであり、大衆のために働くことで何の見かえりも要求しない精神は正に『俠』の本道であり、その上、その行為の影響が一個人に限られるのではなくて、社会全般に及ぶものであるのであれば、既成の社会体制の枠にとらわれないという意味で、それは『俠』の本質を貫いたもの」としている。梁と通ずるものがあると思う。(中国文学における『俠』について、その一 司馬遷と魯迅—その二つの異なる見方について 東京学芸大学紀要 第二部門 第二十九集 一九七八)

また梁啓超「中国之武士道」(一九〇四年)、「飲冰室專集」広智書院刊? 第四冊)について、「三十三年之夢」の注釈では(宮崎滔天全集第五卷所収)、西郷、月照、吉田松陰などは、國家社会の為、「身を殺して仁をなした」俠士とみなし、俠士の根本的精神は武士道にあるとして、中国でも武士道の精神を認識、鼓吹しなければならないと述べている(六〇八頁)。

(14) 『飲冰室文集』九(一九六〇年 台湾中華書局)所収
 (15) 内村鑑三『代表的日本人』(鈴木俊郎訳 一九四一年 岩波文庫)
 「内村鑑三著作集」(一九五三年 岩波書店)第一六巻 一一頁
 (16) 荒木見吾「士と三教(a)禪」(窪徳忠 西順蔵編「宗教」一九六七年 中国文化叢書 全一〇巻 大修館の第六巻)
 (17) 前掲『代表的日本人』(岩波文庫)五一頁
 (18) 梁啓超『六君子伝』(清議報)第四冊 「戊戌政變記」第五篇 光緒二四年一二月一日
 (19) 高田淳『中国の近代と儒教—戊戌変法の思想』(一九七〇年 紀伊国屋書店)一二二頁
 (20) 荒尾は西郷を崇拜し、また本人も西郷の如き人物と称されていたが、

(21) 『民報』第三号(一九〇六年四月)、また九号(一九〇六年一二月)には寄生(汪東)「答新民」、去非(胡漢民)「賀希望督撫革命之失望」が掲載されている。前者は西郷と勝の江戸城会見を紹介し、後者は袁世凱がワシントン、西郷隆盛のような人物でないことを悲しむという主旨である。

(22) 『宮崎滔天全集』(全五巻 平凡社) 第四巻所収
 (23) 同右第二巻所収
 (24) 同右
 (25) 中国革命を支援した日本人のたまり場の一つであつた対陽館(当時、芝区愛宕町)主人に対して、犬養毅は「養心俠骨」という書を贈つてゐる。(上村希美雄『宮崎兄弟伝』アジア篇上 葦書房 一九八七年)の口絵参照) また伊藤痴游に「俠骨物語」(註61を参照)がある。

(26) 『湖北学生界』第三期 光緒二九年三月及び五月を参照。
 (27) 一九〇三年五月に結成された軍国民教育会はその主旨が「養成尚武精神、実行愛國主義」であり、參加した留学生の思想傾向として「棄

文習武」があつたと思われる。（中華民国史資料叢稿、楊天石 王學庄編『拒俄運動 一九〇一—一九〇五』一九七九年 中国社会科学出版社）一〇六頁以下

（28）『民報』 第七号（一九〇六年九月）

（29）丸山真男氏は西南戦争以降を「われわれの国の“近代化”は“封建的忠誠”とその基盤を解体させることによって、同時にそこに含まれたかぎりの“反逆”的ダイナミズムも減衰させて行つたのである」という分析に通ずるものがあるようと思われる。（「忠誠と反逆」『近代日本思想史講座 6 自我と環境』一九六〇年 筑摩書房 四〇四頁）。

（30）蕭鴻鈞編『日本明治維新小史』（一九〇六年 清国留学生会館）中 村義「華訳『明治維新史』覚書」（『辛亥革命研究』第四号、一九八四年）を参照

（31）征韓論について、煙山専太郎「征韓論実相」が華訳されている。原著は一九〇七年九月早稻田大学出版部で出版され、翌年、華訳された

ようである。華訳本について未見であるので、原著からその主旨をい

えば、煙山は西郷征韓論者の無理解を批判するため、大隈重信が所有する西郷の書簡、嚴本善治の手による勝海舟日記、篠原国幹宛西郷書簡等を活用して、西郷は決して、一方的に朝鮮に侵略を企てる征韓論者の元凶でないことを実証している。たゞこの一冊のみで断定することはできないが、すくなくとも「日本明治維新小史」と併せて、中国側の情報にはこうした観点が提供されていたことを指摘しておきたい。

（32）毛利敏彦「明治六年政變の研究」（一九七八年 有斐閣）、及び「明治六年政變」（一九七九年 中公新書）この他に、専論として、伊東昭雄「明治初期の興亜論について——大アジア主義の形成」（横浜市立大学論叢 第三三卷 人文科学系列 第三号）がある。その一節に「西郷隆盛と征韓論争およびその周辺」がある。毛利氏は後者（二一八頁）で「西郷は最悪の事態には使節暴殺→開戦の危機を覺悟したにせよ、あくまで交渉による朝鮮国とその修交をもとめたので

あつて、そのために使節就任を切望したと推論するのが、諸史料から判断して最も合理的であろう」という。

（33）松浦玲『明治の海舟とアジア』（一九八七年 岩波書店）五三一五

七頁。この書に引用されている詩と比較すると、中国人留学生の引用は一句がおちている。すなはち嗚呼一高士の次に「只道自居正」が入っている。たゞこの一句と次の句とは、別の表現もあることを松浦氏は述べている。

（34）湖南編訳社は黃興、許直、陶惺考、陳範、李振鐸、魏肇文、楊毓麟、張孝準等が発起人となつて組織され、『游学訳編』を刊行した。

（35）中華民国史料叢編『湖北学生界』 第一期（一九〇三年一月）

（36）『新民叢報』第七号（光緒二八年四月）の口絵には日本維新二偉人として、西郷と福沢の像が掲載されている。第二二号（光緒二八年一月）には維新前愛國両大俠遺像として吉田松陰と藤田東湖が載せられている。

（37）中華民国史料叢編『游学訳編』 第二期（一九〇一年一二月）

（38）毛注青、李鰲 陳新完編『蔡鍔集』（一九八二年 湖南人民出版社）に採録されている「致湖南士紳書」と全く同文である。

（39）訳者不明。国会図書館編『明治期刊行図書目録』には「明治柱石伝」は掲載されていない。もう一つの「明治百傑伝」は同じ書名で千河岸貫一著（明治三五年三月）と山口孤剣著（明治四四年一月）の二種類がある。山口のものは発行年代が『游学訳編』より新しく、また两者の内容は『游学訳編』のものと異なっている。

（40）前掲『宮崎滔天全集』 第五冊 六九二頁

（41）「新日本」第一卷 第一号（明治四四年一二月）

（42）「世界新聞」「東京一二六新聞」（大正五年一月一日）

（43）「東京朝日新聞」（大正五年一月一日）

（44）同右 大正五年一月一日

（45）同右

- (46) 「黃興南京脱走ノ顛末ニ付報告ノ件」(『日本外交文書』 大正二年
第一冊 三八一頁)。
- (47) 「日本及日本人」(大正二年九月下)
- (48) 「東京朝日新聞」(大正五年一月一日)
- (49) 湖南省社会科学院編『黃興集』(一九八一年 中華書局)三四五頁
所収「致徐宗漢書」(一九一三年七月二六日)。この書簡については、
左舜生『黃興評伝』(一九六八年 伝記文学出版)では、この書簡に
はいくぶん遺書的意味があるという(一一〇頁)。
- (50) 松浦玲『明治維新私論—アジア型近代の模索』(一九七九年 現
代評論社)
- (51) 宮地正人『日露戦後政治史の研究』(一九八六年 東京大学出版会)
三一四一三一七頁
- (52) 同上二五三頁
- (53) 『日中問題重要関係資料集第一巻』(一九七一年 龍溪書舎) 五
〇一五二頁
- (54) 米庚余『日本西南戦争』(一九八六年 商務印書館)には、後藤靖
氏の研究成果を学んでいると思われる。結論的には、西郷は本質的に
は封建士族の典型で、西南戦争は結局、封建士族の利益、頑固士族の
反映であると、また韓文媚『西郷隆盛悲劇的思想根源』(明治維新的
再探討)世界歴史編輯部編 一九八一年 新華書店)では西郷の「敬
天愛民」は歴史の発展に適応し、人民の願望に符合する反封建主義の
思想であるとする。「廢藩置県」は西郷の力であった。しかし、西南
戦争は彼の発動でもなければ、彼は組織者でもなかつた。では彼は何
故死んだのか、その理由については井上清氏に学んでいると思われる。
すなわち、西郷はブルジョア改革の必要性を知っていたが、しかし、
長年の同志と生死を共にしなければならなかつたのだ。悲劇であつた
と。以上のように一九四九年以降の明治維新や西郷研究は解放前およ
び抗日期とは異なる次元と思われるので、本論の対象外としておきた
- (55) 中国科学院歴史研究所『五四爱国運動資料』(一九六九年 大安影
印)。伊東昭雄・小島晋治他『中国人の日本人観一〇〇年史』一九七
五年 自由国民社) 一三三頁
- (56) 「与長崎新聞記者的談話 一九一四年一月一三日」(『孫中山全集』
第一卷 三六三頁 一九八六年 中華書局)
- (57) 「軍人精神教育 一九二二年一月」(同上 第六卷 所収)
- (58) 戴天仇著市川宏訳『日本論』(一九八三年 社会思想社)
- (59) 蒋方震『日本人—一個外国人の研究』(『日中問題重要関係資料集
第一巻 龍溪書舎 所収)
- (60) 北京大学図書館所蔵のもの。当時東京学芸大学学生として北京大学
に留学中の長井暁君(現在NHK勤務)に復写してもらつた。全文二
五八頁
- (61) 家禾は鄭学稼の別名か。一九三六年当時、次のような時評を書いて
いる。いざれも「申報週刊」「日英在華経済勢力之消長与対立」
一卷一三期(一九三六年四月五日)
「日本政変後之陸軍陣容」一卷一五期(一九三六年四月一九日)
「馬場財政政策与中國」一卷一六期(一九三六年四月二六日)
「広田内閣与軍部」一卷一八期(一九三六年五月一〇日)
「広田内閣之危機」一卷二五期(一九三六年六月二六日)
「読日史雜記」一卷二九期(一九三六年七月二六日)
「讀日史雜記」一卷三六期(一九三六年九月一三日)
- (62) 上村希美雄氏が「宮崎兄弟伝・日本編 上・下」(一九八四年
革)

書房）に続いて「アジア篇 上」を刊行している（一九八七年）今後
の研究はこれらの雄篇の成果を吸収しなければならない。

（昭和六十二年八月三十日受理）